

マクルーハン『メディアの理解 (メディア論)』論述構造の分析

——メディアのホット/クール概念の社会学的生産性の高い解釈に向けて——

山梨県立大学 大西康雄

1 問題の所在と本報告の目的

マーシャル・マクルーハンは、1960年代のブームが去った後しばらく際物視されていたが、インターネット時代を迎え再評価されるようになった。しかしながらその再評価は、主として今日見られるようなインターネットやホームコンピューティングの普及に代表されるような「電子的未来」の予言者としてであり、彼の理論自体が十分に再評価されたためとはいいがたいだろう。その理由は、彼のホットなメディア、クールなメディア概念に代表されるように、その概念の定義や区分が分かりにくいことにもある。このため、マクルーハンの著作は、読み手が読みたいマクルーハン「理論」像を「読み取る」ある種「鏡」あるいは「黙示録」的役割を果たしてきたようにも見える。

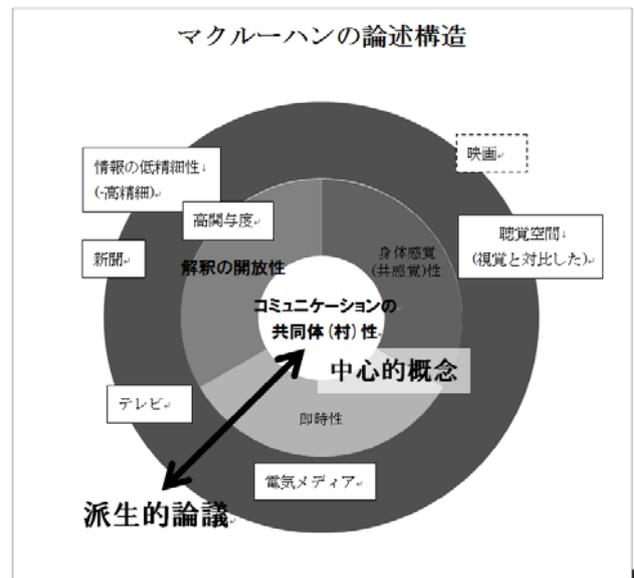
報告者は以前の論考 (大西, 2014) にて、彼のもっとも有名なこのホット/クールメディアという概念について、意味決定 (解釈開放) 性とメディア移転可能性の二つの次元に再構成して読み取りなおすことが社会学 / 社会科学的に生産的なのではないかと提案した。

今回の報告では、マクルーハンのこの概念を扱った中心的な著作である "Understanding Media (邦訳: メディア論: 人間の拡張の諸相)" を中心に、一見して論理的破綻と矛盾だらけに見える彼の論述構造 (特に社会学的) を抽出し、より体系的な彼の著作理解を促し、社会学/社会科学上生産的な解釈導出に資することを目的とする。

2 分析および議論

まず、報告者はマクルーハンの議論がアイデアを全くアドホックに並べたものではなく、何らかの理論的見通しに立脚するものと仮定する。その上で、彼の議論を彼のアイデアのコア概念にかかわる中心的議論と、例示などにかかわる派生的議論に段階的に分解できるものである、というアイデアを提示する。

そしてマクルーハンの議論は中心的な論議ほど概念イメージが明確である一方、派生的な論議ほど、概念イメージの明確性が減少し、必ずしも全体的な整合性が考えられて議論されている訳ではないことを示す。マクルーハン理論の矛盾や論理的破綻と思われる部分はこの派生的部分であり、マクルーハンの生産的読解にはこの部分に拘泥すべきでないと報告者は主張する。



3 結論

このような論述構造理解に従ってマクルーハンの議論を読解すると、彼の議論のもっとも中心概念はコミュニケーションの共同体性 (村的性格) である。そこから彼の議論の、解釈の開放/固定性、コミュニケーションの身体感覚性、コミュニケーションの即時性の三領域を導出する。この構造を踏まえた上でマクルーハンを読解することが生産的な解釈につながると、報告者は主張する。

文献

マクルーハン, M. 1987[1964], 『メディア論: 人間の拡張の諸相』 栗原裕、河本仲聖訳、みすず書房
 大西康雄, 2014, 「マクルーハンはデジタルメディアの夢を見たか」, 『山梨国際研究』 9